



写真3 ●東京・目黒にある新生銀行の運用センター
シンガポールにも同様の拠点を構えている

図6 ●新生銀行は、アジアを中心に複数の拠点を目的に応じて使い分けている



シンガポールで運用、マニラで開発 新生銀行

東京・目黒にある新生銀行の運用センター。日本人とインド人が大型画面を見ながら、勘定系などシステム全般の動作状況を監視している(写真3)。そこにはテレビ会議システムの端末もあり、同じような運用センターが映し出されている。画面の向こうはシンガポールだ。2007年9月から段階的に使い始め、この2月から本格的に稼働させたばかりである。

シンガポールの運用センターは、東京の運用センターがあるビルで動作するHPとデルの小型サーバー 1500台と、それらの上で動く各システムの動作状況などを監視する。佐藤芳和 執行役システム企画部長は、「ネットワークを介して東京と同レベルの業務ができるようにしてある」と説明する。東京のバックアップという位置付けではなく、月曜日は東京、火曜日はシンガポールといった具合に2つの拠点を併用していく考えだ。

Windowsは英語版を利用

なぜシンガポールなのか。佐藤執行役は、「英語ができる国際的な人材を確保したいから」と答える。新生銀行は邦銀ながら、英語の活用にこだわっている。海外製のソフトウェアは基本的に日本語版でなく英語版を使う。Windowsはもちろん、印i-flexソリューションズの「FLEXCUBE」、印ニュークリアス・ソフトウェアの